

涅槃經が楞伽經の主な表現主体ではなかったか

常 盤 義 伸

さる二〇〇六年一月八日、柳田聖山氏が逝去されました。私は柳田先生のお誘いで、柳田先生が入矢義高先生と一緒に始められた禅文化研究所での禅語録研究会、そしてお二方が熱心に推進してくださった大慧宗杲「正法眼蔵」研究会に、その後も参加させていただいています。柳田先生が文学部長をされていたときに花園大学教授会員に加えていただいていた以来私が蒙った学恩の深さを思い返しながら拙論をまとめました。

以下の拙論は、日本佛教学会年報第七二号（平成十八年度報告）に二月一日に提出したものを基にして
いるが、もともとこの紀要への寄稿のご依頼を受け『大般泥洹經』を読みながら考えたものである。

『楞伽經』四卷本については、二〇〇三年六月、私が私家版で漢文校訂・訓読本、それを基にして南条文雄博士校訂梵本を再構成した梵本、その英訳、和訳の計四冊で一部を構成する「楞伽宝經四卷本研究」を「百部、計四冊の自費出版をし、（交流のあった研究者に無料で差し上げてきた。その後希望された方々には送料を負担していただき、現在私の手元には自分用を除いて梵、英、各十冊、日、数冊が残っている。）英訳と和訳とのそれぞれの前書きでテキストについて、また序文でこの經典の基本的な思想の要約を述べた。（二〇〇五年一月、四冊それぞれの正誤表を、それまでに進呈したすべての方にお届けした。残部があるかぎり、希望される方に送料を負担していただいで無料で差し上げることになっている。）

(使用テキスト)

大般泥洹經 『仏説大般泥洹經』六卷。大正大藏經三七六番。法顯訳(四一八年)

(チベット大藏經北京版七八八番をデルゲ版二二〇番で修正しながら参照し、漢訳を訳出)

楞伽〔宝〕經 『楞伽阿跋多羅宝經』四卷、大正大藏經六七〇番、グナバドラ訳(四四三年)

(南条文雄校訂梵本一九二三年を、上記漢訳により修正し漢訳の原型として再構成して訳出)

(参考書)

横超慧日『涅槃經』サーラ叢書26 平楽寺書店一九八一年

下田正弘 藏文和訳『大乘涅槃經』(1) 山喜房佛書林一九九三年

同『涅槃經の研究——大乘仏典の研究方法試論』春秋社一九九七年

一 『楞伽經』の不食肉章

「慈悲」とはどういうことかを『楞伽經』に即して考察するとき、巻一の初めに聴衆の代表者・大慧が南海に面するランカーの島の山頂に滞在された仏陀の徳を讃えて述べたとされる六偈(T.16, 480a)が注目される。初め四偈では、仏陀は世間が生滅、識別の対象、常無常、主・客の実体性を離れ、要するに有無を離れていると洞察する智をもたれるからこそ、そういう洞察をもたず有無に執着する世間の人々にその実相に目覚めてもらいたいという大悲心を起こされる、と讃え、あとの二偈で、涅槃と仏陀とを二つのことと見えない、一体だ、という。

「貴方は、世間が生と滅とを離れて虚空に咲く花に似、有とも無とも捉えられないと洞察して、「洞察

をもたないものに」慈悲を起こされる。(一、1)

貴方は、すべてのものが幻のようで、心の識別能力を離れ、有とも無とも捉えられないと洞察して、慈悲を起こされる。(一、2)

貴方は、世間が永遠と破滅とを離れ、常に夢のようで、

有とも無とも捉えられないと洞察して、慈悲を起こされる。(一、3)

貴方は、主体も客体もともに無我、煩惱も知の対象も常に無相なので

汚れを離れていると洞察して、慈悲を起こされる。(一、4)

涅槃のときに貴方はどんな涅槃に入ることもなく、

涅槃が貴方のなかにあるのでもない。過去にそれを悟ったとか、

これから悟るとかいうことがなく、有と無との二辺を離れておられます。(一、5)

ムニ(貴方、黙される聖者)を、寂靜で生滅を離れておいでだと觀察するものは、

すべて現生に囚われず、來生に汚れることのない人々です。(一、6)

『楞伽經』は「般涅槃(パリニルヴァーナ)」を「聖智の自覺の境界」と解し、壊滅でも死滅でもないとして、「涅槃(ニルヴァーナ)」と区別しない。それは「壊」と「死」とを離れた、修行者の「帰依する所」だという。

そのとき、優れた菩薩・大慧は再び世尊に次のことを尋ねた。「完全な涅槃(パリニルヴァーナ)」と言われるこの名称は、何を指して言うのでしょうか。」

世尊が言われた。「一切の自性の習慣性、およびアーラヤ識(すべての識別能力の場所、根本の識別能力)と意(思考力、願望)と意識(意の識別能力)との抱く固定した見解の習慣性、が転じて根源に還ること

が涅槃だと、あらゆる覚者も私も言います。涅槃の境界である、自性が空であるところに住することです。

さらに大慧よ、涅槃は、聖智の自覚の境界として、常と断との妄想、有と無と、を離れています。どうして常ではないかと言いますと、特殊と普遍との特徴を妄想することを捨て去っているからです。断ではないとは、すべての聖者、過去、未来、現在の彼等が、自覚の境界に達しているからです。

また、涅槃は壊滅でもなく死滅でもありません。もしも涅槃が死滅だということになれば、再び生で始まる相続となるでしょう。もしも涅槃が壊滅だとすれば、作られたものという特徴に陥るでしょう。そういう理由で、涅槃は、壊滅でも死滅でもありません。それは、壊滅と死滅とを離れた、帰依所として、修行者たちが達するものです。

また、涅槃は、捨てることもなく獲得することもないから、断でもなく常でもないから、一でもなく多でもないから、涅槃(滅)と言われるのです。」(T16: 492b)

しかし『楞伽經』に先行する『大般泥洹經』では、それは仏陀の死を指し、最後の供養を捧げるチュンダを始めとする大衆が仏陀の死をどのような境界と理解するのが本当か、それを形容する「無常」という語の普通の意味が妥当しないとすれば、それはどういうことなのかを仏陀自らが説き明かすことが、その一貫する主題となっている。そのことを『楞伽經』の登場人物たちはよく知っていたはずである。右に引用した「般涅槃」の説明として、「涅槃」は壊滅と死滅とを離れた、修行者が達する帰依所だとすること自体、実は仏陀の死を修行者が理解する仕方の説明になっている。先に引用した卷一、第五偈の「涅槃」は、仏陀の死を意味する「般涅槃」にも読める。『楞伽經』では、大慧が讃える仏陀の徳、すなわち世間が虚空に咲く花、幻、夢、に似て、煩惱も知の対象も無相で汚れを離れているという洞察に人々を導こうという慈悲の働

きが展開される。このようにして『楞伽經』全体の議論には、優れた一貫性がある。ただ、巻四の終りに見られる不食肉章がこの經典内で占める位置が、私には明らかでなかった。『楞伽經』巻一初めに大慧が仏陀の徳を讃えたあと、仏陀の答えを求めて発する「二〇八」の問いの一つ（第四三偈、南条本第二章第四五偈）に、不食肉章導入を予測させる唯一の言及が見られる。

「どうして肉食しないのか、どうして肉を禁ずるのか。

なぜ肉食の種姓に生まれたものが肉を食べるのか。」（一、43 481h）

不食肉章では、もちろん、慈悲に由来するその存在理由が明らかにされている。大慧は仏陀に肉を食べないことの功德と食べることの過失とについて、教えを乞うて云う、

「眞實を間違つた仕方で宣言した人々、世間を究極とする見解に囚われる他の非仏教者たち、断滅か常住か、有か無か、の両辺に囚われる人々でさえも、人が食べている肉を取り去って、食べることを許さないのですから、況や、世間の守護者よ、慈悲において変わりない正覚者の貴方が示された教えにおいて、人々が肉を食べてもよいとか、人が食べている肉を取り去らないということがありませんか。」

(T16, 513c)

仏陀は、これに答えて、測り知れない理由で肉を食べてはいけないとして、その理由の幾つかを本文の長行と偈とで挙げる。それらを要約して偈の番号で示すと、次のようなことである。

(1) 動物たちのなかに、生死流転の過程で、我々人間の親兄弟姉妹子供などの親族あるいは縁者でなかったものはないと云ってよい。その意味で、すべての生きとし生けるものに由来する肉を、覺の眞實を求めるもの、菩薩、が食べることはできない（四、77）。

(2) 肉や酒、にんにくなどは、食べることによって欲望を募らせ、修行者を解脱から遠ざけるものであ

る(四、78)。

(3) 欲望を募らせるものの期待に忘れて、利益を求めて業者がたいのばあい罪もない動物を殺すことは修行者の見過ごすことのできない悪行である(四、82)。

(4) 食物は薬に似、必要以上に取るべきものではない。なぜなら、すべての食物は「自分が食物の入手できない状況のなかで生命の存続のためにやむをえず食べる」一人息子の肉にも比せられるもので、本当にやむをえず摂取するために選ぶものである(四、92)。

これを要するに、肉食は無慈悲で、解脱を求めるものの取るべきものではない(四、95)。(T16、513c-514a)

『楞伽經』不食肉章の長行最後の箇所では次のように述べる。

「大慧よ、人間の利益追求のために、大部分のばあい動物が罪もないのに殺されるのです。他に殆ど理由はなしにです。たいていは、肉への欲望に突き動かされた無知な人々が、あれやこれやの網や道具を投げ入れます。捕鳥業者、羊飼い、漁夫などが、空を飛ぶ、地上を行く、そして水中を行く、罪もない様々の種類の動物たちを、利益を求めて殺します。

さらに大慧よ、魚や他の肉で、自分のために用意されたのではなく、自分が用意させたのではなく、また欲しいと思ったのではないという理由で声聞が食べるのにふさわしいもの、というものはありません(「無三淨肉」第八三偈)。

私の教えの記録のあちらこちらで、自然死の動物の肉の五種ないし十種が、食べてはいけなくなっています。しかし、今私はあらゆる種類の肉を、どういうときにも無条件に禁じます(今於此經一切種一切時開除方便一切悉斷)。大慧よ、「如来は目覚めた真理を身体とし、目覚めた真理を食べ物としてとることになっ

ています。欲望の身体をもたない」如来は、肉を食べるようにはなっていない（如来応供等正覚尚無所食、況食魚肉）。すべての衆生を平等に自分の一人息子とみなす如来は、きわめて慈愛溢れる存在です。私自身がすべての衆生を一人息子だと意識していますから、どうして声聞たちに一人息子の肉を食べることを認めましょうか。」(T16, 514a³⁻¹²)

ここに至って仏陀は、肉食に対する一切の例外を撤廃して、すべての生類への慈愛の思いが徹底すること修行者に求める宣言をする。『楞伽経』はこの不食肉章のあることによつて大いにその存在意義を發揮しているということができる。ただ、それにも関わらず、これが経全体の教義とどのように関わることかという点は、これだけでは必ずしも明らかでない。

『楞伽経』の不食肉章の中心思想が大乗の『般』涅槃(「パリ」ニルヴァーナ)経(法顯訳、チベット語訳、曇無讖訳を含めて)のすでに説く所であり、その展開であるということとは、先学が指摘される所であるが、実は『楞伽経』自体がそのことを明かしていることが知られる。すなわち、同じこの不食肉章に、大慧の問いを示す二偈に答える仏陀の二十偈(第七七―第九六偈)が、長行の後に見られる。そのうち第八七偈で仏陀は食肉を禁ずる經典名を挙げる。

「ハステイカクシユヤ(象のごとき威風)』と『マハーメーグハ(大きい雲)』、『アングリマーリカ(指の首飾りを集めるもの)』、そしてこの経

『ランカーヴァターラ(ランカーに入る)』で私は肉を禁じた。」(四、87 514b)

実は南条梵本(第八章第一六偈)は第2と第3との間に『ニルヴァーナ』を含めている。

hasūkaksye mahameghe nirvāṅgulimalike/

lankavatara-sūtre ca mayā māmsam vivarjitam//

他の漢訳（ボーデイルチ訳 T564b³⁰⁻³¹、シクシャーナンダ訳 T624c³⁻⁴）も同じ。（ただしボーデイルチ訳だけは、長行では「アングリマールカ」を含むが、偈文では「シュリーマラー（勝鬘）」を挙げる。）

下田正弘氏のご指摘（『涅槃經の研究』第四章注81、82）に従って『文殊師利問經』を見ると、その編集者がこの四卷本『楞伽經』のまさしくこの偈文に注目していたことが知られる。

「世尊よ、もしも「そのような例外を設けたうえで」肉を食べてもよいとしますと、象亀經、大雲經、指鬘經、楞伽經等の諸經では、なぜ一切の肉を断っているのでしょうか。」（T14, No. 468, 493a）（梁、僧伽婆羅訳を口語訳。「象亀經」の「亀」は「勇」の誤写か。）

これは、四卷本『楞伽經』の偈文に大乘の『涅槃經』の名が含まれていなかったことを傍証する貴重な資料である。しかしまた、『大雲經』がそのなかに『涅槃經』を知っていたことを示す表現を含む以上、この偈は『楞伽經』自体が『涅槃經』を知っていたことを伝えるものである。実は私は、『楞伽經』が『涅槃經』の名を挙げない所に両經の極めて密接な関係が、不食肉章に限らず両經の所説の中心的な部分について看取されると理解している。

『大雲經』曇無讖（タルマクシエーマ）訳（T12, No. 387）巻五初めに次の表現があり、自分の經名を大雲、大般涅槃、無想と、三つ挙げ、その理由を説明して云う、

「大雲密藏菩薩の問う所の故に大雲と名づけ、如来常住にして畢竟して涅槃に入る者あることなく、一切の衆生悉く仏性あるが故に名づけて大般涅槃と為すを得、是の如き經典を受持し誦誦して一切の想を断つが故に無想と名づく。」（T12, 1099ab）

『指鬘經』と云われるものは、『雜阿含經』のその大乘版グナバドラ訳（T2, No. 1077, 120）『央掘魔羅經』四卷のことである。その巻四に次の表現がある。

「文殊師利、仏に白して言う、世尊、如来蔵に因るが故に諸仏は肉を食せざるや。仏言う、如是。一切の衆生は無始の生死を生生輪転して、父母兄弟姉妹に非ざるなく、猶、伎尼の変易常なきが如く、自肉と他肉とは則ち是れ一肉なり。是の故に諸仏は悉く肉を食せず。」(T2, 540c)

これは全く『楞伽經』と一致する。「文殊師利」の名は『涅槃經』との関連を伝える。

私は、『楞伽經』不食肉章長行の上記箇所に対応する表現を、法顕訳『大般泥洹經』の卷三、四法品第八に見出して、始めてこの章の存在意義を知る事ができた。グナバドラ訳以後の「楞伽經」偈におけるこの『涅槃經』への言及は一見、当然と思われるが、実はグナバドラ訳にそれへの言及がないことの方が、重要である。この問題は、『涅槃經』を『楞伽經』と読み比べることによって十分に解明されると私は考える。『楞伽經』は、根本のところで『涅槃經』の涅槃觀を共有し、否、むしろそこから出発しながら後者の物語的な表現スタイルを離れて、すべてにおいて、論書とも違った経独自の、厳密な思想表現を意図したと考えられる。『涅槃經』の編集者たちが新たな構想のもとに『楞伽經』を開演した、と云ってもよいのではないか。

二 『大般泥洹經』の仏陀が般泥洹に臨む「今」、修行者に不食肉の制を説く

法顕はニルヴァーナを涅槃 *niepan* と泥洹 *nihuan* との二様に訳し分け、前者を『大般涅槃經』三卷 (T1, No. 7) に、後者を自分がインドから持ち帰ったとする (『法顕伝』T51, No. 2085, 864b) の方等 (大乘) の『大般泥洹經』の訳出に当てる (大正大藏經第一巻では、法顕の『大般涅槃經』に先んずる二経とも「泥洹」を経名に用いている。No. 5 西晋の白法祖訳『佛般泥洹經』、No. 6 失訳『般泥洹經』)。しかし法顕訳のこの方等経 (T12, No. 376, 853-899) に相当する部分を含めてその五倍弱の長さをもつ大乘の『大般涅槃經』四十卷

(T12, No. 374, 365-603) だけを訳した曇無讖には、そういう訳語の区別は必要でなかった。以下、煩わしさを避けるため、直接の引用以外は「涅槃」「般涅槃」または「ニルヴァーナ」「パリニルヴァーナ」を用いる。

『楞伽經』によれば、ニルヴァーナは前述のように、生滅、有無、断常の特徴をもって見られ執せられる世間がそのような特徴を離れて無相であり、見、執するものも無相であると知って執着に由来する苦悩を離れること、そしてその離れた主体の在り方を意味する。「大般泥洹經」の一貫した中心主題は、そういう生滅、有無、断常を離れたニルヴァーナ主体である仏陀が寿命尽きてなくなることに、すなわち「大般涅槃」と云われることを我々はどのように理解すべきかということである。それを無常という文字に従って理解しては、その実相から遊離する。大般涅槃の実相は無常と常住とを離れて、仏陀だけが知る境界であるが強いて云えば「常」であることを、知らなくてはいけない、仏陀の死を機縁としてその真の意味を考えよ、というのである。

『大般泥洹經』第八品「四法」の第三「能随問答」で仏陀は、对告衆・迦葉(チベット語訳では「大迦葉の一族の若者」とする)に、布施の意味について根本的な理解を引き出すために、師弟の上下の關係に囚われな自由な発想で発言する事を求めるなかで、質問に答えて云う(ここでの質問者・迦葉は、『楞伽經』での大慧の原型と考えてよい)。

「私は今日から弟子の修行者たちに肉を食べることを許さないことに決めます。肉以外の食物についても、我が子の肉を食べているのだという思いであるべきです。どうして私が弟子たちに肉を食べてよいと云えましようか。諸仏とともに私は、肉食することが大慈悲心を起こす道を断つことだと云います。」

(T12, No. 376, 868c²⁴⁻²⁶)

「三種の淨肉も、食べる事を許しません。あなたが食べてもよいと理解していた九種、そして禁ぜられてきた自然死の十種以外の動物の肉も、禁じます。その理由は、肉を食べる人が歩いていても、じっとしていても、座っていても寝ていても、他のすべての生物たちは、その人に殺氣を嗅ぎ取って恐怖に陥るからです。ちょうど人がヒング（にんにく臭の植物）やにんにくを食べると、人々の集まりや群衆のなかで誰それがそれを食べたと分かり、不愉快になり憎むのと同じです。肉食者と分かると、すべての生物がその臭いを嗅ぎ取り、死の恐怖に打ちのめされます。その人が前に進むと、水中、地上、空中に住む生き物たちは皆おびえて、かれが我々を死に追いやるのだ、と氣を失い、さらには死ぬでしょう。こういう理由で、優れた菩薩が肉を食べることはありません。人々を教化するために時に応じて食べる姿を見せても、本当は食べていないのです。」(T12, 869a¹⁰⁻¹⁷)

「私は今まで何かの事情が見られた時点で条件付きで肉食を禁じてきましたが、今、個別の事情を離れて、私の死の前にして全面的に肉食を禁じます。〔肉を食べる事は他に危害を加える事になるからです。〕」

(我説有因縁者制不食肉。今日無因縁者因説大般泥洹、亦復制令不応食肉。T12, 869b¹⁵⁻¹⁷)*

*原文で「今日」は前の句で「我今日説」となっているのをチベット訳文によって後に移した。

↳snaŋ ni don gyi dmigs byun ba'i (P56b) skabs su bstan to \\na' dir ni sa za ba las gnod par 'gyur bar nas bstan te \\di ni na yons su mya nian las 'da' ba'i tshé man du bśad pa yin te \\

曇無讖訳の相当箇所が法顕訳とチベット語訳との示す本経の仏陀の決意の深さを十分伝えることになって
いるのかどうか、私には疑問である。すなわち曰く、

「我今是の断肉の制を唱う。若し広く説かば即ち尽くすべからず。涅槃の時至る。是の故に略して説く。」(T12, No. 374, 386c¹¹⁻¹³)

仏陀の死が大般涅槃（優れたパリニルヴァーナ）と云われるのは、それが住するところなくして住する仏陀の境界・ニルヴァーナの不死の死であるからである。如來は死ぬことによって死んだことがない、それ故、それは「常住、常恒、久遠」と云われる、そういう死を示す事が諸仏の本性（常法、chos mid）だ、とされる（T12, 871b²²⁻²⁵, P64a²⁻⁴）。いわば、不生の生を生きる仏陀が不死の死に臨んで、限りある命の尊さを人々に訴えることが、この經典の世間への使命であったと思われる。『楞伽經』の編集者は、この重要な使命を自らの立場として踏まえたからこそ、臨終の地クシナガラでの仏陀ではなく、南海のランカーを訪れた仏陀が人々に不食肉を説く經典として、大『パリニルヴァーナ經』の名を言葉に出さずに、新しく説かれた『楞伽經』の名を挙げることにしたと考えられる。時代が下って編集された十卷本、七卷本、梵本の『入楞伽經』では、四卷本『楞伽宝經』の編集者たちが『涅槃經』に抱いていた一体感を見失った為、不食肉を説く經名に『涅槃經』を含めることに何の躊躇もしなかったものと思われる。

（二〇〇五年九月―二月ハンブルク大学名誉教授シュミットハウゼン氏は京都大学大学院文学研究科でのセミナーで梵本『入楞伽經』不食肉章の写本研究の成果を紹介される中で一〇月五日この問題に触れ、『楞伽經』編集者たちが仏陀が死去した後、『楞伽經』を説いたとする矛盾を避けるために『涅槃經』の名を挙げなかったのが真相だと思ふと話された。それまで私は、『涅槃經』卷十八、梵行品八の四の仏陀の説明（T12, No. 374, 473c）で、不食肉を十種に限る、いや一切許されない、と弟子たちの間で伝承が別れているとするのが『涅槃經』の立場と見て『楞伽經』がこれを取り上げなかった、と考えていた。）

三 『楞伽經』が『涅槃經』の涅槃觀を出発点とすると考えられる理由

『楞伽經』の思想と対比するための『涅槃經』のテキストとして、曇無讖の四十卷本『大般涅槃經』ではなく、法頭の六卷本『大般泥洹經』を私が用いた理由は、その六卷が大乗の『涅槃經』の思想を示すのに十分な完結体を示していること、チベット語訳はその説明が法頭訳とは異なり、むしろ曇無讖訳と共通するが、法頭訳と同じところで終わっていること、四十卷本の相当範囲の訳文が、法頭訳より遥かに読み易く後世の中国仏教者たちの引用源になっているにもかかわらず、例えば上に引用した全面的な肉食の禁止の箇所に見られるように、般涅槃の前に残された時間がないといいつながら、全体の説明が却って冗長に流れる傾向を示して、六卷本が終了する箇所後の部分は、無際限に補足される可能性を示し、対比上不適当だと考えたことにある。

『楞伽經』四巻のうち、初め二巻は菩薩のための「三万六千の教え」、いわゆる八識、五法、三性、二無我を中心に語句の批判的な説明がなされる。後半の二巻は、梵本、七巻本の章区分にも見られるように、「無常とは何か」、「現証」、「如来は常か無常か」、「五法と三性」、「自内証と比喩」、「刹那・非刹那（諸識とアーラヤ識・如来蔵）」、「化仏」、「不食肉」を含み、仏陀の境界の説明が中心である。巻三の終り、世間論者批判の前には、『唯識三十頌』の第二〇偈、第二八偈に相当する表現を提示する箇所がある。それは唯識教義の紹介が目的ではなく、仏陀の慧眼の働きを独自の仕方で説明するものである。そういうことも含めて、如来の立場が紹介される『楞伽經』の特に巻三と巻四とは、『涅槃經』との深い関連を示す。

法頭訳で『大般泥洹經』を読み進めてゆく過程で、『楞伽經』に見られるのと同じ用語に出会って驚くこ

とが少なくない。「忍辱仙人等」(T12, 855c)、「蚕虫網を結びて自ら纏う如く」(859a)、「彼の蚕虫網を締して自ら纏いて出処なきが如く」(893a)、「彼の童子(金剛力士)者是れ化作のみ」(864b)、「国[土]荒乱」(861a, 897b)、「義に依りて文字に依らず」(880a)など。しかし、「パリニルヴァーナの仏陀を無常と見てはならない」「如来は常住だ」とするこの経の主題と、「一切皆如来常住の性有り諸結縛を滅し煩惱永く尽きて如来常住の性(如来藏)を顕現す」(883a)、「清浄と不浄との相を凡愚は謂いて二と為す、慧者は能く諦了す自性則不二と」(886b)、そして「イツチャンティカ(一闍提、解脱を求めて求めないもの)」、「阿羅漢に似たる一闍提は方等を誹謗し」「悪業を行ず」、「一闍提に似たる阿羅漢は声聞を毀訾し広く方等を説いて衆生に語って、我れ汝等と俱に是れ菩薩、所以者何ぞ、一切皆如来の性有るが故にと云」い、「慈心を行ず」(892c)など、『大般泥洹経』のこれらの表現についての両経の理解は、ほとんど一致する。(『楞伽経』で「イツチャンティカ」は巻一、五種性の最後、無種性の項T16, 487bcで扱われている。)

『大般泥洹経』巻六後半には、「有余(未完)」と「無余(言い残しのない)」の偈頌表現を巡って仏陀と仏陀の意向を踏まえて発言する文殊師利との間に四回にわたる興味深い応酬がみられる。言い残しのある表現とは、条件に応じてなされるもので、条件が違えば全く逆の表現が可能とされる。第三回の応酬で、文殊師利が、また偈を説いている、

「父母を敬い 供養を増せば 人は親孝行のせいで 死んで無間地獄に墮ちる

世尊は、この偈で、無明が父で愛欲が母だから、父母の恩愛に従う人々は諸々の悪業をますます造り続けることになり、死ねばたちどころに無間地獄に墮ちると説かれました。」

その時、世尊が再び文殊師利に申された、「私が次の偈で言う通りです、

他者に囚われるものはすべて苦しむ 独自に行くものはすべて楽しむ

驕慢に囚われるものはみな恐ろしい。自ら喜ぶものはすべて喜ばれる」(898c)。

これは『楞伽經』卷三初めの「内的五無間業」(T16. 498a) につながる表現である。それに続く「外的五無間業」(498b) に相当するものは『大般泥洹經』卷六、問菩薩品第十七に見られる。すなわち、

迦葉菩薩が仏陀に尋ねた、「教団を追放される四つの重罪(パーラジカ)と死んで無間地獄に墮ちる五つの罪(五無間業)という、ターラ樹の頭の部分を切り落としてしまったような取り返しのつかない罪を犯したのもや、悟りを求めることもなく発心をしたことのないものは、どうすれば悟りの因を生ずるでしょうか。」

仏陀は迦葉に言われた、「この人々が、夢の中もしくは命が尽きて地獄に墮ちた時に、ああ、我等は正法を犯して自分でこの罪をしかしてしまった、と後悔の心を生じて、心に誓うとします、我等が今のこの恐怖を免れてよそへ行くことができたら行く先々で発心して菩薩の悟りを求めるのだ、と。こういう人々は、大般泥洹經の影響力を受けて、神々や人間の世界に生まれた時には必ずや発心して悟りの因ができるでしょう。」(T12. 893b)

『大般泥洹經』卷六、隨喜品第十八で仏陀は、仏陀の死を悲しむな、これは実は人々に喜びを実感してもらう絶好の機会なのだという意味の、次の偈を述べる。

「君たちは私のことを悲嘆してはいけません。諸仏についても同じことです。」

仏陀は涅槃する と云っても 仏陀の真理を言い尽くしてはいないのです

如来とは常住の在り方です 永遠の最も安穩な境界です

本当かと疑う人は 心を傾けて私がこれから言うことを聞きなさい

私はすでに飲食の欲望を離れ 飢えや渴きを覚えることがありません

これから私が話すことを聞いて 君たちにぜひ喜んでいただきたい

私はすべてのの人々に安穩と 喜びをもってもらいたいのです

諸仏如来の境界は 真に常住のありかたです

今、君たちは聞き終わったら あらゆる努力を尽くしてください

からすとふくろうとは 習性があまりにも違いすぎるのに

それが一緒に群れ遊び 同じ木に止まってじゃれあうことになれば

すべてを一人子ラーフラとみなす如来のこと

当然、慈悲は捨て去って 永遠に涅槃に入りましょう

生氣溢れる毒蛇と(毒蛇を捕食する)マングースが 同じ木の根に住み着くなら

如来は慈悲を捨て去って 永遠に涅槃に入りましょう

エーランダ(ヒマ)樹が 百葉華と同じ芳香を発することになれば

如来は慈悲を捨て去って 永遠に涅槃に入りましょう

カルカ樹の実がタマラ樹の実と同じ味になるならば

如来は慈悲を捨て去って 永遠に涅槃に入りましょう

イツチャンティカが誰も皆 すべてのものの平等を悟るなら

如来は慈悲を捨て去って 永遠に涅槃に入りましょう

すべての人々が一度に仏道を成就するならば

如来は慈悲を捨て去って 永遠に涅槃に入りましょう

仮にもしも蚊の尿だけでこの大地を水浸しにし

百川となつて溢れ流れて 大海をも一杯にすることがあれば

如来は慈悲を捨て去つて 永遠に涅槃に入りましょう

君たちすべての人々は、深く正法を願うからこそ

如来が永遠にいなくなると思つて 憂え悲しみ愁嘆するのです

今からは如来のことを 常住ではないなどと考へてはいけません

如来のありかたは とこしえで変わることはありません

如来が示す教えも、それに従う修行者の集まりも なくなるものではありません」

この長い偈で仏陀が、仏陀の死を悲しむ人々に知つてほしいことは、仏陀が慈悲を捨て去つて永遠に涅槃に入ることが全くない理由は、イツチャンテイカという在り方がなくなることはないこと、したがつて、すべての人々が一度に仏道を成就するということは残念ながらありえないことにある、という。「イツチャンテイカ」は、『涅槃経』特有の語としてあちらこちらでその定義のような説明がなされるにもかかわらず、訳語はまったく与えられていない。この偈の表現に従えば、イツチャンテイカ（欲するもの）とは「すべてのものの平等を悟らない」で自分だけの救いを欲するものということになる。そのために、イツチャンテイカは大乗を誹謗する、とか、大乗を説くこの涅槃経の教えを聞いても、それが心を触発して菩提を求めるとならない、とかと言われる（T12, 302ab）ことに繋がる。具体的には、このばあい、それは自分の死、そして人々の死が、仏陀の死と同じく、生死を離れて死であること、死であつて生死を離れていること、を悟らないことである。生も死も、生死を離れて生であり死であること、それが生死の本当の自性であることを人々が悟らないかぎり、すなわち、人々がイツチャンテイカであるかぎり、仏陀は死すなわち般涅槃において般涅槃に入ることなく大般涅槃経を説き続ける、ということを、この偈は表明する。これは、『楞伽経』

の初めに大慧が仏陀の洞察と慈悲と涅槃とについて仏陀を讃えたことと通じることがらである。

『大般泥洹經』四法品第八後半で仏陀が如来の出現の希有さを説明するなかで、イッチャンティカが生死の本当の自性に適わない仕方では救いを求めることを次のように述べるのは。イッチャンティカの語義を理解する上で参考になる。

「例えば嬰兒に歯がまだ出ていないときにこれを生やすことはできません。真の解脱も同じです。その時に至らないものには解脱はありません。なまくらにだらだらと寝転がったまま終日自分は仏陀になるのだというイッチャンティカが成仏するわけはありません。たとい仏陀の教えを信じ、あるいは敬虔な在家信者となっても、解脱を願って彼岸に達することは、ありません。まして、ごろ寝するものにおいておやです。そのわけは、解脱は解脱の自性以外によつては成就しないからです。それで解脱は、これを成就するものがないのです。その解脱こそは如来です。」(T12: 873a)

以上のような対比考察を通して私は、『楞伽經』巻四の第八七偈が不食肉を説く経として『涅槃經』の名を挙げないことが、「慈心不食肉」以外の内容をも含む『楞伽經』の思想の中心的な表現主体を『涅槃經』と考えるうえで重要な鍵の役割を果たしているように思う。

四 『涅槃經』の「無常」

『涅槃經』が『楞伽經』編集のさいの中心的な表現主体ではなかったかという考えを推し進めて行くばあい、『涅槃經』が『楞伽經』に劣らず言語表現においてきわめて批判的であることを初めに確認しておく必要がある。そして、この点はきわめてはっきりしている。哀歎品第四によれば、人々は無知と欲望とに災い

されて自己でないものを自己、常住でないものを常住、安楽でないものを安楽、清浄でないものを清浄と誤って捉える。この誤りを離れるために修行者は、常住ではない（無常）、安楽ではない（苦）、自己ではない（空または無我）、清浄ではない（不浄）ことを現実の実相として修する。しかし今、仏陀の死を無常、苦、空または無我、不浄と見ることは真に仏陀の死を見ることではない。なぜなら仏陀こそは真の自己であり、その目覚めた存在すなわち法身は常住であり、その涅槃は安楽であり、その指し示すすべては清浄である。従ってこの自己、常住、安楽、清浄は世間を超出した如来の在り方であって、言葉通りの世間的な性質のものではない。しかも、これは如来のばあいに限られるのでなく世間そのものにおいて世間の実相として現前する、世間を離れた在り方、として知るべきことなのだという。すなわち、自己は無我・空と、常住は無常と、安楽は苦と、清浄は不浄と「平等だと知らない」からその修行は正しい修行となっていないのだ、と言う（T12, 862a）。

同じ趣旨のことは、問菩薩品第十七後半の「シンダヴァス」の喩えにも見られる。シンド河（インダス）流域の人々の自慢の産物、塩、水、馬、剣のすべてが「シンダヴァス」（シンド河産）の名で呼ばれ、流域一帯を支配する大王は「シンダヴァス」の一語でそれらの四つのどれかを求め、家来たちは状況に応じて大王の要求に応える。食事のさいには塩を、食事が終われば水の入った容器を、大王が広大な林園に行きたくて「シンダヴァス」と言えば、馬を、敵軍との戦闘に向かう時には同じ言葉で利剣を用意する。同様に大乘の教えにも四種の例がある、として「無常」をその一例とするが、その「四種」が何であるかについての経典の説明が、二つの漢訳でもチベット語訳でもはっきりしない。私はこれを次のように理解する。すなわち如来の涅槃は無常と云っても、普通の無常ではない、そこには大乘独自の理解をするための工夫が必要である。如来が身は病患の集まりであり僧宝もやがては滅びる、と苦を説くばあい、やはり修行者には大乘独自の苦

の理解がなければならぬ。如来が無我を説くときも同じである。無我こそは本当の我・自己なのだ。空・無相・解脱を説けば、当然大乘の理解が必要である。すなわち解脱は常住で変化を離れている。このように「無常」の語は、大乘では苦、無我・空、解脱と別ではなく、また空・解脱であることによって無常は常、楽、我、淨である如来であり、また人々に本来備わる如来の本性(如来蔵)でもある(T12: 894d)。これが『涅槃經』の「無常」である。こうして『楞伽經』の主な表現主体ではなかったかと考えられる『涅槃經』は、大乘独自の解脱としての「無常」をその代表的特徴としていたとすることができる。実際『楞伽經』の「無常」は、明らかにそうなっている。

原文(大正大藏經卷二、一一、一四、一六)

一 世間離生滅猶如虛空華 智不得有無而興大悲心 (T16: 480a: 1k1) 一切法如幻遠離於心識 智不得有無而興大悲心 (480b: 1k2) 遠離於斷常世間恒如夢 智不得有無而興大悲心 (483) 知人法無我煩惱及爾炎 常清淨無相而興大悲心 (k4) 一切無涅槃無有涅槃仏 無有仏涅槃遠離覺所覺 若有若無有是一悉俱離 (k5) 牟尼寂靜是則遠離生是 名為不取今世後世淨 (k6)

爾時大慧菩薩摩訶薩復白仏言 世尊 般涅槃者説何等法謂為涅槃 仏告大慧 一切自性習氣蔵意識見習転 變名為涅槃 諸仏及我涅槃自性空事境界 復次大慧 涅槃者聖智自覺境界離斷常妄想性非性

云何非常 謂自相共相妄想斷故非常 云何非斷 謂一切聖去來現在得自覺故非斷 大慧 涅槃不壞不死 若涅槃死者復應受生相続 若壞者心墮有為相 是故涅槃離壞離死 是故修行者之所帰依

復次大慧 涅槃非捨非得非斷非常非一義非種々義 是名涅槃 (T16: 492b)

云何不食肉 云何制斷肉 食肉諸種類 何因故食肉 (T16: 481b, 1k43)

惡邪論法諸外道輩邪見斷常顛倒計著尚有遮法不聽食肉 況復如來世間救護正法成就而食肉耶 (T16, 513c)

復次大慧 凡諸殺者為財利故殺生屠販 彼諸愚癡食肉衆生以錢為網而捕諸肉 彼殺生者若以財物若以鈎網 取彼空行水陸衆生種々殺害屠販求利 大慧 亦無不教不求不想而有魚肉 以是義故不応食肉 大慧 我有時

說遮五種肉或制十種 今於此經一切種一切時開除方便一切悉斷 大慧 如來應供等正覺尚無所食 況食魚肉 亦不教人 以大悲前行故視一切衆生猶如一子 是故不聽令食子肉 (T16, 514a)

縛象与大雲 央掘利魔羅 及此楞伽經 我悉制斷肉 (T16, 514b, IV 187)

爾時文殊師利復白仏言 世尊 若得食肉者 象龜經大雲經指鬘楞伽經等諸經何故悉斷 (T14, 493a)

善男子 如是經典凡有三名 一名大雲二名大般涅槃三名無想 大雲密藏菩薩所問故名大雲 如來常住無有 畢竟入涅槃者一切衆生悉有仏性故得名為大般涅槃 受持誦誦如是經典斷一切想故名無想 (T12, 1099ab)

文殊師利白仏言 世尊 因如來藏故諸仏不食肉耶 仏言如是 一切衆生無始生生死生流轉無非父母兄弟姊妹 猶如伎兒變易無常 自肉他肉則是一肉 是故諸仏悉不食肉 (T2, 540c)

二 善男子 我從今日制諸弟子不聽食肉 設得余食常當応作食子肉想 云何弟子而聽食肉 諸仏所說其食肉者斷大慈種 (T12, No. 376, 868c)

不聽食三種淨肉及離九種受十種肉乃至自死一不得食 所以者何 其食肉者若行住坐臥一切衆生見皆怖畏聞 其殺氣如人食興菓及蒜 若人衆會悉皆憎惡 其食肉者亦復如是 一切衆生聞其殺氣恐怖畏死 水陸空行有命 之類見皆馳走 是故菩薩未曾食肉 為化衆生隨時現食其実不食 (T12, 869a)

我說有因緣者制不食肉 今日無因緣者因說大般泥洹亦復制令不応食肉 (T12, 869b)

我今唱是斷肉之制 若広說者即不可尽 涅槃時到 是故略說 (T12, No. 374, 386c)

三 爾時文殊師利復說偈言 恭敬於父母增加其供養 緣斯孝道故死墮無捩獄 世尊 此偈無明恩愛以為父母

衆生隨順令其增長造諸惡業 死即當墮無劫地獄 爾時世尊復告文殊師利 如我所說偈

一切因他勢力苦 一切己力自在樂 一切驕慢勢暴害 一切賢善人所愛 (T12, No. 376, 898c)

迦葉菩薩白仏言 世尊 犯四重禁及無間罪如截多羅樹及不樂菩提未發心者 云何能令發菩提因 仏告迦葉是諸衆生若於夢中若命終時 墮泥犁中而生悔心 哀哉我等毀犯正法自招此罪而生誓心 於此得免生余処者在在処処要當發心為菩薩道 是摩訶衍般泥洹經威神力故 是等衆生天人中必得發心為菩提因 是故我說 犯四重禁及無間業皆得發心為菩提因 (T12, 893b)

汝等莫悲歎諸仏法心爾 雖曰為泥洹亦未究竟 如來常住法永処最安穩 諸有狐疑者諦聽我今說 我已離食想身無飢渴患 我今當為汝說其隨喜法 令一切衆生得安穩快樂 諸仏如來性真實常住法 今汝等聞已當勤方便修 如鳥及梟鳥其性甚相違 能令同群遊止宿相娛樂 如來視一切猶若羅睺羅 应当捨慈悲永入於泥洹能令盛毒蛇兔羅同其穴 如來捨慈悲永入於泥洹 能令伊蘭樹同百葉華香 如來捨慈悲永入於泥洹 能令迦留果味同耽摩羅 如來捨慈悲永入於泥洹 能令一闍提悉成平等覺 如來捨慈悲永入於泥洹 若一切衆生一時成仏道 如來捨慈悲永入於泥洹 仮使蚊蚋水浸壞此大地 百川皆流溢大海悉盈滿 如來捨慈悲永入於泥洹 汝等諸衆生深樂正法故 謂如來永滅憂悲而愁歎 從今於如來莫念非常想 當知如來性長存不變易 法僧亦復然皆非摩滅法 (T12, 896bc)

譬如嬰兒其齒未出不能令生 真解脫者亦復如是 非時得者無有是処 如一闍提懈怠懶惰尸臥終日言當成仏若成仏者無有是処 仮使信法諸優婆塞欲求解脫度彼岸者亦無是処 況彼尸臥 所以者何 性非他成故 是故解脫無能為者 其解脫者即是如來 (T12, 873c)